

熊本県での高校生交通安全教育活動 連載:第2回

思いやる心を持ち、ルールを守ってもらうために

自転車通学に慣れてくるとルール違反をしてしまう

高校生になると通学距離が長くなることなどから、通学手段として自転車を使う生徒が増える。一方で、自転車乗用中の交通事故死者数の14・2%は高校生年代(16~19歳)である。また、高校生年代の交通事故死者数を状態別にみると、自転車乗用中が38・2%と最も多く、自動車乗用中(30・4%)や二輪車乗用中(27・8%)を上回っている。そのため、自転車通学者の多い高校では、生徒への自転車教育...



熊本西高校では生徒全員が自転車に乗ってパイロンスラロームなどの課題に取り組んだ

パイロンスラロームの2回目は片手運転で、パイロンを避けるのが難しいことを体験してもらう



一時停止標識のある交差点では停止線の手前で止まること、止まる時は必ず左足で着地すること、発進する時は右左右や後方を確認することをHondaのインストラクターや熊本西高校の先生方が生徒一人ひとりに指導



横断歩道では自転車を降り、押して歩くように指導



クルマにはミラーに映らない死角があることを生徒たちに説明

育は重要な課題といえる。こうしたことから、この高校生交通安全教育活動においても、自転車の教育プログラムを推進モデル校に展開している。生徒のほとんどが自転車通学という熊本県立熊本西高等学校(熊本市)では1、2年生710名を対象にした自転車の実技指導を5月23日(1年生、24日(2年生)に実施した。

同校生徒指導部交通係の赤星光教諭は、「高校入学当初は生徒たちも緊張していることもあって慎重に乗っているのですが、慣れてくるとルール違反が目立ってきます。そのため、毎年5月に自転車の実技指導を行っています」と話す。

「今回の高校生交通安全教育活動は生徒にとって効果があるものだと感じ、一緒にやらせていただくことにしました。交通安全という部分に限らず、ホンダという一般企業の社員の方と接したり、その立ち居振舞いを見ることは、生徒の人間形成においても貴重な経験となるはず」と赤星教諭は期待する。

危険行動であることに気づいてもらう

今回は、校庭の4カ所にトレーニング用のコースをつくり、本田技研工業(株)安全運転普及本部熊本普及プロックのインストラクターと同校の先生方がコースの各所で、生徒の乗り方を観察しながらアドバイスをを行った(詳細は写真参照)。

指導を受けた2年生の生徒は「歩行者のこともっと考えて走らなければいけないと感じた」「自分で両手運転と片手運転を比較してみても、片手運転の危険を実感できた」「クルマからの視点が学べて良かった」という感想を語っていた。

※自転車安全利用五則を正しく理解してもらう

熊本県立湧心館高等学校(熊本市)でも、同校の1、2年生289名を対象にした交通安全教室が実施された。

1年生を対象に7月10日は、熊本西高校と同様にグラウンドを使って、自転車の実技指導。翌11日は雨天のため、2年生は体育館で座学を中心とした内容となった。

まず、熊本普及プロックのインストラクターが「交通ルールを守るといことは、自分を交通事故から遠ざけることだと考えてください」と、自転車安全利用五則について解説した。

次に、自転車の交通ルールにちなんだクイズをいくつか出題し、生徒たちに答え、その理由を尋ねていく。例えば、「自転車通行可の標識がある歩道だったが、歩道は人が多く急いでいたので、車道の左側を自転車で行った。これは○か×か。答えは○。答えた生徒は「自転車は車両なので、車道の左側を走るとは問題ないと思います」と理由を述べると、他の生徒から拍手が起きた。

他の交通参加者を思いやる心が大切

続いて実技。この日は雨天で会場が体育館に変更となったため、生徒の代表者が自転車を運転する様子、他の生徒が見学するという形がとられた。

5名の生徒がパイロンスラロームを行う。「パイロンは歩行者だと思ってください。また発進するときは右、左、右と右後方を確認してください」とインストラクター。1人目の生徒は両手で、2人目は片手で、3人目、4人目は傘に見立てた棒を持って、5人目は荷台にインストラクターを乗せて運転する。2人目以降は途中でバランスを崩してしま...



座学ではインストラクターが自転車安全利用五則を説明した後、交通ルールに関するクイズを出題し、生徒に答えてもらった



湧心館高校1年生は校庭で実技を行った



湧心館高校2年生を対象にした交通安全教育では雨天のため、体育館で傘差し運転や二人乗りでのパイロンスラロームを生徒の代表者が体験



推進モデル校の1つ、洛々巒高校は4月、1年生を対象に交通安全センターレイナー熊本で自転車教育を実施。生徒にいつも走っているスピードで走ってもらい、生徒の見えないところからボールを投げる。見通しの悪い場所では、止まって観ることの重要性に気づいてもらうためのプログラム



自転車の前カゴに重い荷物を入れた状態でパイロンスラロームをやってもらい、車体が不安定になることを体験し、いかに危険なことか学んでもらった

しまし、うまく進むことができない。「ルールを違反した運転をする、危険であることがわかったと思えます。そして、皆さん自身が危険なだけでなく、歩行者に対して脅威になります。これからは自分のことだけでなく、道路を利用して様々な交通参加者の立場で考えて運転しましょう」と、インストラクターは他の交通参加者を思いやる心を強調し、交通安全教室は終了した。

同校生徒指導部交通係の興梠聖二教諭は「傘差し運転や二人乗りの危険性が生徒に伝わる内容でした。生徒が自分の頭で考えるように工夫したり、相手を思いやる心に触れた点も良かったと思います」と話す。高校生が将来、二輪車や四輪車の運転者となっていくことを考えると、自転車教育を通じて、思いやりの心を持った交通社会人を育てることは大きな意味があるといえる。